

「三つの方針」をもとに
スポーツで国際協力を

2006年の夏、私は障害者に対する水泳指導の短期青年海外協力隊員となり、マレーシアでも視覚に障害のある子どもたちに水泳を教えました。パラリンピアンとして、中学校の教員として、そして視覚障害者水泳教室の講師として得た経験を伝えたいという思いで挑戦しました。ペナン島では20名近くの盲学校の子どもたちを指導しました。視覚障害者は見て学ぶことができませんから、手取り足取り教えました。心がけたのは、泳ぎ方よりも「潜り方」を教えること。プールの底に基石のようなものを沈めて拾ってきたり、潜っている私の手に触って何本か当てっこしたり。遊び感覚で楽しく潜ることを覚えた子どもたちは水への恐怖心がなくなり、短期間である程度泳げるようになりました。

そんな一人ひとりに届く協力隊事業をはじめ、JICAは多岐にわたってスポーツを通じた国際協力を展開している。その方針は、①人間力の向上を、②社会参加の促進を、③自国に誇りと喜びを、というものだ。スポーツを通じて達成感や自己肯定感が高められ、競技によってはチームワークやコミュニケーション

力も養われますが、そのためには指導方法も重要になります。人間力の向上のためには、人間として成長し、仲間と喜び、励まし合えることの幸福を感じられるような指導が必要だと思います。

また、スポーツのよさは多様なケースに適用できることですが、その利点が生かされていない現状も見受けられます。たとえば一般的な競泳では、バタフライや平泳ぎでゴールのときに片手タッチだと失格になります。それでは片腕がない選手は参加できない。社会的弱者が参加しやすい受容力のある社会をつくるには、こうしたルールを変更したり現状に適応させたりする柔軟な発想を持つことが必要ではないでしょうか。1992年、私は17歳でバルセロナ・パラリンピックに参加しましたが、障害者スポーツがこれほど注目され、応援されるものとは思っていませんでした。あの日々の感動と驚きは一生忘れません。

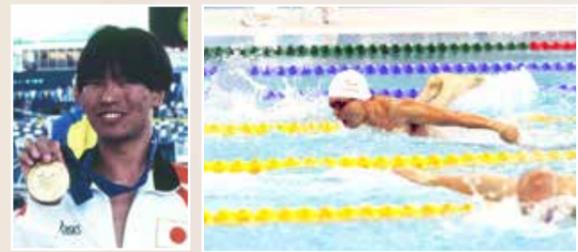
東京パラリンピックでも多くの人が夢や誇りを感じられるよう、競技会場を満員にすることや選手村の環境整備に取り組み、ホスピタリティを提供したいと思います。

さらにJICAは、スポーツを通じた国際協力で市民の参加を促している。東京2020に出場する各国の

特集 **スポーツと開発**

人々の可能性をひらく

「スポーツと開発」というテーマは、スポーツをすること自体が権利であり、その実践を通じて個人や集団の能力を高めたり、可能性を広げることで、人々の生活をより健康で豊かなものとする考え方に基づいている。その意義について、日本パラリンピック委員会委員長の河合純一さんが語った。



左：1996年のアトランタにて。パラリンピック2度目の出場でも二つの金メダルを獲得した。右：2008年の北京にて。得意の自由形のほか、バタフライや背泳でも活躍した(写真提供：エクスワン)。

河合純一(かわいじゅんいち)さん
1975年静岡県生まれ。早稲田大学大学院教育学研究科修了。92年バルセロナ・パラリンピックに全盲の水泳選手として出場して以来、パラリンピックに6大会連続で出場し、金・銀・銅21個のメダルを獲得。現在、日本パラリンピック委員会委員長、東京パラリンピック日本代表選手団団長、日本パラリンピアンズ協会理事(前会長)などを務める。著書に『夢追いかけて』(ひくまの出版)。



スポーツの力で豊かな社会を!

① 人間力の向上を

学校での体育の授業や運動会の実施、課外活動の支援を通じて、健康で活力ある生活を送るための基礎を培いながら、目標達成への忍耐力や、他者との協調性といった数値では測定しにくい能力の向上を目指す。

② 社会参加の促進を

障害者や女性、子どもなど社会的弱者の積極的な社会参加を促す。さまざまな出身地の人々が集まり、同じ目標に向かって協力し合うことは、民族間の融和を図り、平和促進にもつながる。

③ 自国に誇りと喜びを

スポーツ競技力を向上させ、国際大会に出場するようなトップアスリートの育成を目指す。アスリートたちの活躍が、国民に誇りと喜び、夢や感動を与え、国民どうしの一体感や国際社会との連帯も生まれる。

さらに! 人や地域と交流を

JICAはスポーツによる国際協力を海外協力隊事業をはじめ1965年から草の根レベルで展開し、2019年3月末までに88か国にのべ4,679名の隊員を派遣している。国内の自治体に向けて、スポーツを通じた国際理解の促進も図っている。

選手を、日本の自治体が事前合宿として受け入れるホストタウンの取り組みへの協力もその一つでしょう。地域に滞在する選手の練習や生活を市民がサポートすることで交流が生まれ、相互理解を深めることにつながるよう期待しています。受容力のある社会をつくるヒントも得られるはず。東京パラリンピックの开幕式が催される日を「ジャパンパラリンピックデー」と定め、それを軸に今後パラリンピックチームイベントを展開していきたいと考えています。よく、「障害の壁を乗り越えて」といわれますが、私はその表現は間違っていると思います。「障害の壁をつくっているのはほとんどの場合、多数の発信者の側ですから、壁を壊す努力が必要なのは、障害者ではなく壁をつくっている側です。東京2020を機にそんな意識の改革が起きればうれしいです。パラリンピックは「人間の可能性の祭典」です。選手を応援することで、「すごい!」と価値観を揺さぶられる瞬間がきっとあるはず。自分たちがつくっている、かもしれない「壁」を壊していきましょう。

また、勝ち負け以上に健康と、よりよく生きることも大切です。スポーツを通じて、心も体も健やかで豊かな人生を送ることは世界共通の人々の願いであると信じ、今後もスポーツのよさを広めていきたいと考えています。